

関ヶ原（大野恵造）

霧深き慶長五年九月十五日の朝まだき

解説 関ヶ原の戦いを描いた詩。

芒生う野山に陣を張るは

総勢八万の西軍

これを邀え擊たんとて備を固むるは

七万五千の東軍驚破や

烽火拳があり法螺貝鳴る

旗指物は揺れ動き喊声は地を這いて

殺氣山野に漲りわたる

この一戦こそや天下分け目の関ヶ原

天下分け目の関ヶ原

語釈 ※関ヶ原＝岐阜県不破郡関ヶ原町を主戦場として行われた野戦。

※朝まだき＝まだ夜が明けきらない時。※西軍＝石田三を筆頭とする軍。

※東軍＝徳川家康を筆頭とする軍。※驚破＝驚くこと。びっくりすること。

※旗指物＝戦国時代に戦場で用いられた小旗または飾物。※喊声＝大勢で突撃をする時などにあげる、わめき叫ぶ声。ときの声。※天下分け目＝天下を取るか取られるかの分かれ目。勝負のきまる大事な時期・場面。

通釈 慶長五年九月十五日の、まだ夜が明けきらない時。芒が生えている野山に陣を張った総勢八万の西軍。是を迎え撃つ為の準備を固めた七万五千の東軍。烽火が上がり、法螺貝がけたましく鳴る戦場。兵士が持つ旗は揺れ動き、喊声は地を這う如くうなり、殺氣が山野に漲り渡る戦いは、天下分け目の一戦である。